

教育研究集会参加による実践的学びの実現を目指した 教員養成系大学における授業実践

荒井 眞一* 青木 香保里**

*北海道文教大学

**家政教育講座

Educational Practice at College of Teacher Education Aiming at Practical Learning by Attendants to the Teachers' Meeting

Shin-ichi ARAI* and Kahori AOKI**

*Department of Health and Nutrition, Hokkaido Bunkyo University, Eniwa 061-1449, Japan

**Department of Home Economics Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

年に一度全道各地の教員が札幌に集まり、合同教育研究集会（以下、合同教研と略す）が開催される。この集会において共同研究者を務める報告者は、北海道教育大学札幌校で担当する教職科目「教育課程と教育方法」受講者60名弱を同集会に参加させた後、講義内において学生各々の目にした実践について報告させ、受講生全員とそれら実践の内容について議論した。

本報告では、講義の概要とともに、講義終了後に学生より提出されたレポート内容の検討をふまえ、本授業実践の成果と課題について述べる。

1. 合同教育研究集会の概要¹⁾

2009年における合同教研の正式名称は「2009合同教育研究全道集会」であり、この実行委員会を構成する加盟団体は、以下の44団体である（図1参照）。

上記集会は、2009年11月13日（金）、14日（土）、15日（日）の3日間にわたり、かでの2・7ホール（札幌市中央区北2条西7丁目）にて開催された。集会は、教育の夕べ、テーマ討論、特別講演、および分科会の4部により構成されている（図2参照）。

分科会は、主たる交流の場となっている。分科会は教科の区分や教育問題に対応し24に分けられており、表1は2009年集会におけるレポート数・参加者数を示

全大教北海道 道私教組 道教組 道高教組 札幌保育労働組合 福祉保育労働組北海道地本建交労働北海道本部 建交労働札幌学童保育支部 勤医労働本部 札幌市学童保育連絡協議会 新婦人北海道本部 共同映画社 道労働者学習協議会 自由法曹団 憲法会議 道平和委員会 キリスト者平和の会 子どもと教育・文化道民の会 北海道子どもセンター 道民間教育団体連絡協議会 日本国民後援会北海道本部 安保反対諸要求貫徹道実行委員会 北海道高等学校退職教職員の会 北海道新英語教育研究会高校国語サークル AALA連帯委員会 日中友好協会 札幌子どもを守る会 道農民連 障道協 札幌郷土を掘る会 北海道合唱団 出版労働札幌地協 劇団さっぽろ道労働 札幌地区労働 道医労働 高校センター教育研究所 全障研北海道 ウイルタ協会 札幌保育連絡会 トボス 全北海道退職教職員の会 少数民族懇談会

図1 2009 合同教育研究全道集会加盟団体実行委員会 (2009合同教育研究全道集会実行委員会発行『開催要項』p. 4)

・教育の夕べ

1. 高校生の演劇
2. 開会集会：代表委員挨拶・基調提案
3. 記念講演：「学校は生きる希望」
福井雅英（北海道教育大学札幌校）

・テーマ討論

1. 「子どもたちにこんな学力を」
2. 「教育費の無償化を考える」
3. 「教師の力量形成と教員免許更新制」
4. 「世界の先住民を考える」
5. 「『若者支援』と『特別支援教育』
—それぞれの実情を考える—」

・特別講演：「ジェンダーからみた社会・教育」

中園桐代（釧路公立大学）

・分科会

図2 2009合同教育研究全道集会における開催内容 (2009合同教育研究全道集会実行委員会発行『開催要項』p. 9)

表1 2009 合同教育研究全道集会の分科会構成と参加者・レポート数 (合同教研 HP より)

【分科会別参加数・レポート数】			レポート総数	参加者 のべ 1,254名			
			220	1日目 (教育の夕べ)	200名		
				2日目 (テーマ討論・分科会)	672名		
				3日目 (分科会)	382名		
分科会	1日目	2日目	レポート数	分科会	1日目	2日目	レポート数
第1 国語教育	18人	17人	13本	第12 総合学習・生活科	16人	14人	8
第2 外国語教育	15	15	6	第13 教育課程と子どもの学力・評価	9	11	8
第3 社会科教育	30	18	9	第14 学校と家庭の生活指導	19	18	13
第4 数学教育	33	19	15	第15 教育条件確立の運動	16人	11	5
第5 理科教育	22	24	15	第16 子ども・父母参加の学校づくり	12	13	7
第6 美術教育	15	11	9	第17 地域における子育て・学習運動	11	15	2
第7 書教育	4	4	5	第18 郷の学校の文化・スポーツ活動	8	7	4
第8 音楽教育	16	11	8	第19 国民のための大学づくり	20	13	9
第9 技術・職業教育	15	13	12	第20 障害児・障害者の教育と福祉	33	37	20
第10 家庭科教育	12	14	8	第21 環境・公害と教育	19	20	16
第11 保健・体育教育	16	18	6	第22 平和・憲法、人権・民族と教育	23	26	12

している。研究集会の概要・成果は、『北海道の教育』として年度毎に書籍にまとめられ、出版されている。

2. 教育大学講義における合同教研への参加と概要

2.1 講義における合同教研参加の位置づけ

2009年度に報告者が担当した北海道教育大学札幌校における教職科目「教育課程と教育方法」に合同教研への参加を位置づけるため、合同教研参加前の講義前半部においては、理論的な考察が可能な実践を学生に提示・解説した。取り上げた実践は、鹿児島県伊佐郡菱刈町立湯之尾小学校教諭・白尾裕志による「伊佐の稲作」である。

2008年度に白尾は、日本社会科教育学会(滋賀大学)のシンポジウムにおいて、自身のこれまでの実践を具体的に取り上げつつ、自身の問題意識と実践とのかわりについて総括している²⁾。オリエンテーションに続く第2回講義では、このシンポジウムにおける白尾報告を足場として、授業づくりと問題意識との関わりについて述べた。続く第3回から第7回講義の間では、白尾より提供された資料の数々を駆使しつつ、実践を様々な角度から分析・考察した。

白尾実践を、“先行研究・実践”として位置づけた分析・考察によって得た知見を、合同教研において学生各自による分析・考察のための枠組みとしてもらうことを講義前半部の狙いとした。

講義後半部7回では、学生2人を1組(原則)として、合同教研の場でみた実践1つに着目させ、1組15分の報告(発表10分、質疑5分)を、受講学生全員に行わせた。学生には、合同教研参加前に、分科会での質問を課していた。それゆえ、報告においても分科会報

告者(多くは学校教員)との質疑の内容を織り込むことを課した。また、報告の聴衆となる学生に対しても、報告に対する質問を行うことを課し、活発な質疑応答の達成を図った。

2.2 教育大学講義における合同教研報告の概要

前節で述べたように、講義後半部第9回から15回までの7回分を学生による合同教研報告に充てた³⁾。学生には、参加する分科会について一切条件は付けず、各学生の望む分科会に参加させた。学生による報告を分科会ごとにまとめたところ、以下のようになった。

* (□で囲んだ報告については、後掲する図3～9参照のこと)

A. 国語教育 (「」は実践名, ()は実践者の所属, 以下同様)
A 1 A 2「ふたつの教材で中学生体験入学授業 小学生生活作文『けんじをふろにいられたこと』と石垣りん生活詩人随筆『花嫁』」(高校)

A 3 A 4「『羅生門』を反戦教材として扱う」(高校)

A 5 A 6「『羅生門』を反戦教材として扱う」(高校)

A 7 A 8「詩の授業を通して『こころ』を考える」(高校)

B. 外国語教育

B 1 B 2「教育運動として自分の授業を振り返る。」(教職員組合)

□ B 3 B 4「小学校における外国語活動」(小学校)

□ B 5 B 6「地域キャンパス校 授業の実際」(高校)

B 7 B 8「教育運動として自分の授業を振り返る。」(教職員組合)

B 9 B 10「愛国心と外国語教育(その2)―赤尾好夫と旺文社の戦中戦後」(大学)

C. 社会科教育

C 1 C 2「戦争の歴史を学び、未来を拓く歴史教育」(退職教職員の会)

合同教研報告資料	
<p>今回、合同教研に参加して一番印象的だったのは、小学校の先生の発表だった。大滝先生は平成21年度からの新学習指導要領の内容に伴い、今までALTに全てまかされていた英語学習の形から自分主導で行う授業になり、大変苦労された先生の一入である。</p> <p>先生は、特に英語が得意なわけではなくむしろ苦手だったそうだが、学校の代表となつてしまひ『小学校における外国語活動教員研究』にも参加したそう。その中で“発音練習”“クラスルームイングリッシュ”“歌・チャンツ”などをやったそうだが、これまでALTにすべてまかせていた先生にとってはとても苦痛の時間になったそう。</p> <p>授業の準備で苦労した点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フラッシュカードなどの教材作り ・思うように進まず意外と時間がかかってしまうため、一人で作るの困難 ・他の先生方にもお願いしながら少しずつストックしていく ・ALTとの打ち合わせ ・英語での会話は難しかったため、校長先生に同席してもらって打ち合わせを行う ・英語で書かれた“Teaching plan”作成をほめかされ、課題となる <p>いよいよ授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初回の授業では担任の隠しきれない動揺を生徒も察知し、冷笑 ・ALTにも「Big voice」と言われる ・しかし activity では盛り上がり“Classroom English”はあまり活用できなかったが無事終了 ・“生きた学習”を行うため、複式三校の合同修学旅行の際に英語で自己紹介 ・子どもたちは相手に英語で“伝える喜び”を感じたのでは ・だんだん授業を組み立てるのが楽しくなる ・一面一面的な授業は確かに楽だがALTとの打ち合わせで作った授業の方がやりがいを感ずる <p>学習のプラス面・マイナス面</p> <p>プラス面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム、チャンツを用いるので楽しく学習することができ、音声言語を ・中心としているのでアリス能力も高められる ・文法までは要求されないの他の授業と比べて感覚的に授業が受けられる ・間違いを受容でき、生徒の習熟度をあまり求めない 	<p>マイナス面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Classroom English を多用した授業が望ましいが、教材研究に時間がかかる ・生かせる場を提供しなければ興味、関心で終わってしまう ・授業の準備に時間がかかり、他の授業への影響も出てくる <p>最後に、先生はこの半年間外国語活動に振り回された感はあるが、生徒たちの興味・関心、知的な要求も高く、生徒たちの意欲的な学習態度に助けられている。また、いつもは発言の少ない生徒もこの時間だけは積極的に発言しているとおっしゃっていた。また、正直言ってしんどい…という場面も多々あるが、小中の系統性も考慮しながら指導を進めていきたいと意気込んでいた。</p> <p>質問・回答</p> <p>質問1 5、6年生では外国語活動が必修化されましたが、他の学年では何か活動を行っているのですか。</p> <p>回答1 1〜4年生では、担任主体ではなくALTを主体とした活動を行っている。また、栄浜小学校では5、6年生でも英語ノートを、使わず、ALTとの打ち合わせの中から教材を考え、実践している。</p> <p>質問2 小中の系統性については具体的にどのようなことを考えていますか。</p> <p>回答2 現在の状況としては、小学校の外国語活動には評価もないため、中学校に入るといきなり勉強！という形になってしまひ、小学校の外国語学習との間にギャップが生まれてしまう。そこで、小学校からのスムーズな移行のために小中で情報交換をし、小学校では最後の方に、中学校のためのつなぎを行ったり、中学校では小学校でやってきたことを使いながら授業を進めていくといったことが必要である。</p> <p>◇感想◇</p> <p>この発表を聞き、現場の先生の外国語活動に対する苦労を実感することができた。現場の先生にしてみれば突然今年から英語をやらなさい、チャンツや歌も取り入れなさい、と言われてもやはりそう簡単にはいかず、とまどうことも多いだろう。しかし、授業を重ねていくごとに教師も生徒も一緒に成長していくことができる。その中でいろいろな発見もあり、新鮮な授業にもなると思う。</p> <p>そもそも英語を学習する必要があるのか、というような議題を提案された方もいたが、今回は時間がなく話し合うことはできなかった。しかし、色々な方が集まっている中でそのような話し合いをするのもおもしろそうだった。</p> <p>小学校の外国語活動には、個々の先生の能力による学習効率の差や英語ノート活用方法など色々な問題があるが、今回様々な意見が聞け、いい経験になった。</p>

図3 学生による「小学校における外国語活動」実践の報告

教育課程と教育方法 D 合同教研報告資料	
<p>「地域キャンパス校 授業の実際」について</p> <p>1 報告の目的</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域キャンパス校制度の理解 ・授業の実際(担当者、生徒の声)を伝える <p>2 概要</p> <p>この報告は、北海道の過疎地域で行われている「地域キャンパス校制度」に対する理解を深め、さらにそこで行われている英語教育の現状を知ってもらうために行われた。</p> <p>地域キャンパス校とは、通学区域内の他の高校への通学が困難な地域にあり、なおかつ地元からの進学率が高い、1学年1学級の高校のことを指す。これらの高校は、教員不足により、授業数が確保できないなどといった問題を抱えている。その問題を解決するために設けられたのが地域キャンパス校制度である。</p> <p>この制度では、地域キャンパス校は、センター校(その地方の中心校)の支援を受けて選択科目(英・数・理)の充実を図っている。センター校は教員を派遣したり、パソコンと通信回線を利用した遠隔操作(黒天候時)で授業を行う。</p> <p>ここでは、宗谷管内の豊富高校での実践が報告された。</p> <p>高校は、1学年およそ20〜30人ほどの学校で、定員割れを起こしている。それに対して、センター校である高校はその地域の中心校である。</p> <p>この報告の発表者である、高校の教諭はOCと英語Ⅱの支援を行っているが、そのおかげで、高校の生徒たちはレベルの高い授業を受けたり、大学受験の情報を得ることができている。さらに、初任教師が多いこのような小規模校において、このような経験豊富な教師に助言をもらえるというのはとても良いことである。このように、地域キャンパス校制度を利用することには非常にメリットがあるように思われる。</p> <p>しかし、それと同じかあるいはそれ以上に、デメリットがあるということも事実である。</p> <p>まず、派遣される側の教師の負担が大きいということがある。この教諭の場合、センター校である高校で勤務してから自家車で高校に向かつて授業をし、その後また種内高校に戻って勤務を再開するという形式をとっているそうだが、これが非常に負担になっている。両校の距離が40キロメートルも離れているうえに、移動には自家車を使用するしかなく、さらに移動中にも事故が起きたとしても、それを保障してくれるような制度は存在していない。宗谷地方の冬はかなりの悪天候が多く、非常に危険である。</p> <p>また、悪天候の場合に、授業を効率よく行えないというデメリットもある。悪天候などで、教師が地域キャンパス校に行けないときには、遠隔操作で授業を行うのだが、この授業はネット回線を通じたものであるため、音声の聞こえ方が非常に悪く、OCなどでの音声指導が必要な作業をうまく行うのはかなり困難である。</p> <p>また、直接生徒と接しているわけではないので、どうしても一方的な授業になりがちであるということも問題視されている。</p>	<p>このようなデメリットの多い制度をなぜ行っているのかという点、それは北海道教育委員会が人員費の削減を行うためである。もう少し現場の人間のことを考えた方策を考えていく必要があるのではないだろうか。</p> <p>3、質問</p> <p>Q 地域キャンパス校制度は北海道でしか行われていないのか?</p> <p>A 今のところは北海道でしか報告されていない。ちなみにこの制度は昨年開始されている。</p> <p>Q 遠隔授業のとき、向こうのクラスの様子はカメラで確認するのか?</p> <p>また、それは誰が操作するのか?</p> <p>A ネット回線を通じてカメラで確認する。授業をしながらカメラの操作もしなければならぬので、非常に負担となっている。</p> <p>4、感想</p> <p>地域キャンパス校制度というものについて全く聞いたこともなかったので、そんな制度があるということにまず驚き、さらにその現状がかなり厳しいものであるという事がよくわかり、そこにも非常に驚いた。</p> <p>このような小規模校しかないような地域の場合、教育を受ける権利を握っていないながら、それができない子どもたちのことを考えるのももちろん1番大事なことであり、と思うのだが、それと同時に教える立場である教師の負担についても、もっと考えていくべきだと思われた。この制度が本当に教育委員会の都合によって行われているのであれば、現場の教師たちのことも考えて、この制度の見直しを行っていかなくてはならないと思った。</p>

図4 学生による「地域キャンパス校 授業の実際」実践の報告

<p>教育課程と教育方法 D 合同教研報告資料</p> <p>教育基本法にもとづく政治教育の実践</p> <p>～<18歳選挙権・18歳成人>に向けて求められる教育～</p> <p>1、実践の背景</p> <p>国民投票法が成立したことによって、18歳に投票権が与えられることや成人の年齢を18歳に引き下げるなどの措置を講ずることが決まった。若者が社会参加することは非常に重要なのだが、そのためには自立をしなければならぬ。その中でも政治的自立は教育基本法による政治的中立を過剰に意識しているために、教育的営みが行われてきたとは言い難い状態である。しかしながら、18歳選挙権・18歳成人が実現する今こそ、政治教育の重要性を認識し、教育実践を展開していく必要がある。そして、選挙権を得ることから有権者として必要な政治的教養の育成が、民主国家の維持発展のために必要不可欠なのである。</p> <p>2、実践の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> 模擬選挙、模擬国民審査 政治家への質問状づくり <p>具体的な政治システムや重要な理念について確認していくために、政治制度について学習を行っていく。その中で大議論という重要な役割を果たしている政治家に質問をした。生徒たちは自分の有権者としての重みを実感し、政治への関心を高めていった。</p> <ul style="list-style-type: none"> オリジナルマニフェストづくり 「社会契約の原点」発表会 <p>まず生徒たちに「社会を構成する理由。社会をつくり、守りたい大切なもの～社会契約の原点～」である。生徒たちは「夢、信頼、個性、家族の健康、…」といったようにさまざまに書いていく。このような大切なものを守るために人々は契約をし、国家権力をつくって守ることを確認する。そこから権力が独断にならないように民衆で統治するの、あるいは国によってテロとかもあるの、強い権力が必要なのかについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「大事な人権」発表会 <p>社会契約の原点が明確に意識されたのち、守るべきもの=人権を考える。ここではフランス人権宣言を読んだ後、「あなた版人権宣言」を書こうということで、「第1条 人は（ ）（な）ものとして出生し、かつ生存する。」の（ ）にあてはまる言葉と、「第11条 （ ）は人の最も重要な権利の一つである。」の（ ）にあてはまる人権を入れてもらう。自然な日常感覚から生まれた案文がたくさん出され、こういう人権を守る国家をつくること、これに反する権力を作らないこと、これこそが民主政治なのだということを書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ディベート「権利 VS 公共の福祉」 オリジナル条例案づくり <p>3、質問</p> <p>Q. なぜ模擬選挙だけでなく模擬国民審査も行うのでしょうか？</p> <p>A. 国民審査で最高裁判官を審査するのですが、不信任率は1割前後となっています。しかも、圧倒的に選挙よりも情報量が少なく、この結果を無批判で受け止めてよいのかと考えるためです。生徒は裁判制度を学習し、最高裁が最終審ということも学んでおり、最高裁判官の重要性を認識しています。だからこそ、模擬国民審査を行うことでこの重要性を生徒に感じ取ってもらおうと目的としています。</p> <p>4、感想</p> <p>今回のこの実践から考えたこととして、いかにして教育の中で生徒に政治的関心を持ってもらい、そこから、18歳になったときの有権者としての政治的意識を持ってもらえるようにすることが大事なのではないかという風に考えた。実際に若者の投票率が下がっているということが現状であり、若者が政治に興味をもてないということが実態としてある。この実践を行った先生も述べているように、若者の社会参加、政治参加は社会・家族の維持・継承においても重要なのである。そして、その意識や関心を高めていくのは政治教育で行うことが一番大事であるし、そういう部分でしかかまえないということも考えられるだろう。今回は高校生に対しての授業であったが、小学生・中学生に対してもすることによって、長期的に関心や社会に対しての意識を持たせていくようにするという方法も考えられるだろう。さまざまな実践を通していかにして生徒が政治的・社会的関心・意識を持ってもらえるかが、この実践を通してわかり、これから教師を担う私たちも社会的関心や政治的意識を持ち、生徒たちに伝えていけるかが必要になってくるのではないかと思う。</p>
--	--

図5 学生による「教育基本法にもとづく政治教育の実践」実践の報告

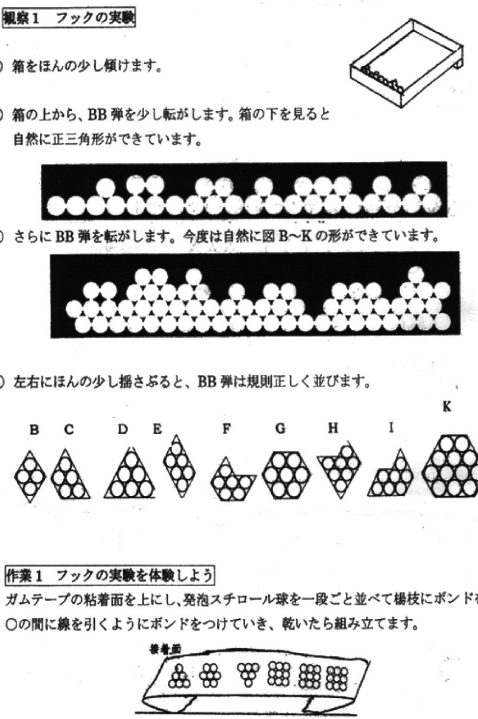
<p>2009合同教育研究全道集會 理科教育</p> <p>実践『フックの実験による結晶と結晶構造の理解』</p> <p>実践の概要</p> <p>高校化学では、突然に原子的なレベルで話が展開される。科学的に解釈すると、「原子や分子などの粒子が規則的に配列したものが結晶の正体なのだが、生徒のイメージとはずいぶん隔たりがある。このギャップを埋め、生徒たちに粒子の正しいイメージを定着させる。」</p> <p>そのためにフックの実験を行った。(2枚目参照)</p> <p>実践の特徴</p> <p>細胞(セル)を発見したロバート・フックは次のような考察をしている。</p> <p>“ものが自然に決まった形になるのは、ものはすべて目に見えない小さな粒の組み合わせが果まっでできているからである。これまで出会ったものの決まった形は、どれも小さな球で表わすことができる。しかも大抵のものはそれらの球を揺さぶりあわすだけである。”</p> <p>このことを踏まえてBB弾を使いフックの実験を再現した。</p> <p>質問と解答</p> <p>質問</p> <p>原子の半径はその原子によってそれぞれ違うのだが、BB弾はすべて同じ大きさである。間違えた知識を教えないために原子半径との矛盾はどのようにして教えるべきか。</p> <p>解答</p> <p>第5分科にいた先生方などで数分議論になっていたが結局その矛盾を打開する答えが出なかったため明確な解答は述べてこなかった。</p> <p>考察(報告者)</p> <p>あくまでこの実験では、結晶構造を学ぶことから全ての物質は原子や分子などの粒子からできているというイメージを定着させることがわらうのである。そのため、今回は原子半径の違いについては考えない方が、生徒に粒子のイメージが伝わりやすいのではないだろうか。</p> <p>実践に対する感想</p> <p>今回、このような会には初めての参加であったが、小学校から高校まで様々な実践に触れることができた。化学分野の実験に最も興味があったためこの実験を選んだのだが、その他の実験も、なかには自分たちにもわからなかったこともあり、とても新鮮だった。</p> <p>化学分野は学年が上がるにつれて、事象の見方が巨視的から微視的に移行していくのだが、この実験では粒子のイメージがつかめるため、微視的な考え方を上での第一歩だと思う。</p> <p>来年度から教育実習となるのだが、今回の合同教研の実験も参考に頑張っていきたい。</p>	<p>3 フックの実験の追試</p> <p>生徒に結晶を粒子概念的に捉えさせるにはどうするか?最もよい方法はフックの実験を追試することと考えた。以下の実験作業を紹介する。</p> <p>観察1 フックの実験</p> <p>① 箱をほんの少し傾けます。</p> <p>② 箱の上から、BB弾を少し転がします。箱の下を見ると自然に正三角形ができています。</p> <p>③ さらにBB弾を転がします。今度は自然に図B~Kの形ができています。</p> <p>④ 左右にほんの少し揺さぶると、BB弾は規則正しく並びます。</p> <p>作業1 フックの実験を体験しよう</p> <p>ガムテープの粘着面を上にし、発泡スチロール球を一段ごと並べて楊枝にボンドをつけ、○の間に線を引くようにボンドをつけていき、乾いたら組み立てます。</p> 
--	---

図6 学生による「フックの実験による結晶と結晶構造の理解」実践の報告

障害児・障害者の教育と福祉分科会 報告資料 「重複障害児のY君に教えられたこと」	
<p>1. 実践の概要</p> <p>この報告は実践者の 先生が、2005年4月から2008年3月まで北海道町にある病弱教育養護学校に動いていた時の実践です。2005年4月養護学校の訪問教育を担当し、当時病棟での学習と登校が許可された一部児童・生徒に短時間の登校学習が組まれていました。2004年からこの訪問教育を担当していた先生は1名で、先生を含む他3名は2005年からの担当でした。4人のチームワークは最初から何でも話し合える雰囲気でした。児童・生徒の授業時間を増やしてあげたいとか児童・生徒一人一人が学校の先生方に認めてもらえるようにしたいとか学習内容はどのような何でも話し合えることができたそうです。</p> <p>2. 実践の特徴</p> <p>今回の報告で取り上げられたY君は小さな時に事故にあい、重い障害を負いました。体を意図的に動かすことが難しくなっていて骨折の危険が大きく、私たちが腕と首を少し動かすこと他、体を動かすのは許可されていませんでした。瞬きはありますが、眼球の動きはあまり大きくなく、頭が反るような状態で眼球も上を向くようなことが多く見受けられました。どの程度見えているのかや視覚認知がどの程度なのかなどははっきりしませんが、見えているかわからないかわからないけど、何か雰囲気を感じているみたいとの話から学習の教材提示を視線にそって顔の上で提示するだけでなく、胸の上で提示するなどして目の動きを引き出そうとしました。以上の点を踏まえて、Y君の学習に胸郭の動きをモールドで伝えて音を出す学習を始めました。呼吸に合わせた胸郭の動きはY君の貴重な体の動きでした。モールドは重さをそれほど感じさせずに音を出して遊ぶには良い教材でした。そして、音楽発表の登校学習の日、モールドに伝わる動きでツリーチャイムを動かし、その音をマイクで拾っている時のことです。佐藤先生が誰かに見られているなと思い、Y君に目をやると、視線は音の出る方向に向いていました。驚くと同時に感動したそうです。その後、音楽発表のビデオを見ると、たくさん瞬きをしていることも確認できたそうです。Y君のうちに秘めた力、生きる力を見る思いがしました。訪問教育という限られた学習環境でも工夫するということが大事なのだと思います。</p>	<p>3. 報告者の質問と実践者の解答</p> <p>・質問</p> <p>Y君のように、骨折の危険性があり、あまり動かすことができないという状態で、ビデオの撮影や、ツリーチャイムを鳴らすなどの実践的な学習を行っていましたが、このようなことをするには保護者の理解がとても必要だと思います。Y君の保護者との関わり合いというものはどういったものだったのですか？</p> <p>・実践者の解答</p> <p>実はこの実践の2カ月後にY君は亡くなってしまったのですが、Y君が亡くなった後もY君の保護者は養護学校のレクリエーションや色々な催しに参加して、お手伝いをしてくれるくらい理解がありました。その理解というものは、Y君の保護者はY君と一緒にレクリエーションや、催しに参加して、自分自身がほんとうにY君と一緒に楽しめたからだと思います。</p> <p>ベッドに寝ているY君をはさんで、Y君の保護者と養護学校の教員たちで風船パレーをしたこともありましたが、Y君は実際には風船パレーをしていないのですが、Y君の保護者や教員たちが楽しんでいるのを見ることで、自分も楽しい気持ちになったのか、時折、笑顔をみせたりもしました。</p> <p>子どもは家族と一緒にいるときに一番安心します。なので、何か行事があればできるかぎり保護者の方に参加してもらおうとしています。そうすることで、保護者には教員たちの行っていることを明確に伝えることができるし、それを積み重ねることで保護者と教員たちの信頼関係が生まれ、理解というものが生まれると思います。全員で共有、共感することが大事だと私は思います。</p> <p>4. 教研に対する報告者の感想</p> <p>僕たちは、特別支援教育専攻なので、この先生の実践というのはとてもためになりました。実際に、Y君のような重度な肢体不自由の方とは触れ合ったことがないので、教員たちの苦労やさまざまなアイデアなどは驚くものでした。そして、Y君は重度でベッドに寝たきりなのですが、ツリーチャイムを呼吸でのお腹の膨らみで鳴らしたりなど、Y君はととても頑張っていて日々を過ごしているのだと痛いほど伝わりました。そして、できたときの喜びなど、微々たるものではあるが笑顔を見せたりして、それを教員が見逃さず、すぐほめたりする場面では、特別支援教育はとでも生半可な気持ちではこなすことのできない教育だとは思いますが、とても温かい教育だなと感じました。</p> <p>質問の保護者との関わり合いということでは、保護者と生徒児童が一緒に楽しく、そして、保護者との信頼関係を築くということに関しては特別支援教育に関わらず、普通教育にも言えることだなと思いました。</p>

図7 学生による「重複障害児のY君に教えられたこと」実践の報告

C 3 C 4 「教育基本法にもとづく政治教育の実践」(高校)

C 5 C 6 「教育基本法にもとづく政治教育の実践」(高校)

C 7 C 8 「教育の自由を奪う道教委―断定された『不適切な』問題と『指導内容』」(高校)

C 9 C 10 「『離職の時』を教材として、使える社会保障制度を伝えたい」(高校)

D. 数学教育

D 1 D 2 「分数を考える」(中学校)

D 3 D 4 「くり下がりの指導法の研究―くり下がりの数を使って」(中学校)

D 5 D 6 「分数を考える」(中学校)

E. 理科教育

E 1 「実験・観察をすすめやすくするために」(高校)

E 2 E 3 「北海道の子どもの理科に関する実態と科学的リテラシーについて」(大学)

E 4 E 5 E 6 「海岸の露頭の観察」「たたら製鉄」(大学)

E 7 E 8 「フックの実験による結晶と結晶構造の理解」(高校)

F. 教科外

F 1 F 2 「重複障害児のY君に教えられたこと」(養護学校)

F 3 F 4 「不登校・登校拒否・高校中退」の討論について

F 5 F 6 第24分科会「不登校・登校拒否・高校中退」の討論について

G. 家庭科教育

G 1 G 2 「生産者との調理実習」(中学校)

同じ実践に対する報告がいくつかあったため、25報告中紹介された実践の総数は21、実践の紹介された分科会の総数は8であった。分科会の総数が24であることを考えれば、紹介された分科会の数は一部に限定されている。学生たちが各々の専攻分野や関心のある分科会に参加する傾向が大きかったこと、一部の分科会が小部屋で行われていたために入室できなかったこと⁴⁾などが、紹介された分科会の数が一部に限定された理由と思われる。

3. 学生のレポートにみる合同教研参加の意義

本章では、講義終了時に学生に課した「合同教研の意義について考察すること」という課題レポートに対する学生の記述を引用し、教育大学生の合同教研参加

の意義について考察する。この考察を行うに際し本節では、各分科会参加の意義と、講義内で行った合同教研報告会の意義という2点に着目する。

3.1. 各分科会参加の意義

以下、前節に示した分科会の順に課題レポートに対する学生の記述を抜粋した後、それぞれの分科会参加の意義について検討する。

A. 国語教育

A 6 私は国語グループで国語教育について学んでいるが、大学で学ぶことは理論や理屈ばかりである。もちろんそれも教員を目指す上で必要なことであるが、教員になったときにそればかりだと戸惑うことも更に多くなるであろう。(中略)、しかし今回合同教研に参加して、私が実際に教育実習へ行く際や、教師になったときに、どのように国語の魅力子どもたちに伝えていくか、非常に参考になる実践例を聞くことが出来た。教師の問いかけに対し子どもが実際にどういった反応をしたのかなど、大学の授業だけではわからない現場の声を聞いて、国語教育に対しさらに学びを深めていく意欲と興味が湧いた。

A 1 私が参加した国語教育分科会では、「国語科で重視すべきこと」について意見の交流が行われた。学習指導要領のなかで、国語科の目標は大きく「話す・聞く」、「書く」、「読む」に分けて設定されている。このことについて、「これでは限定されてしまっているのでは」という意見が出たことが始まりだった。目標の根底にあるのは「言葉」である。そして、この三領域を達成するためには、「言葉」を使って「考えること」が重要だ。だからこそ国語科では土台となる「言葉」に着目することが必要なのではないか、という新たな課題が生まれたのである。他にも、「定番教材の読みは、ずっと同じで良いのか」という議論も行われた。このように、参加者全員で意見を出し合うことで問題が浮かび、それを今後の課題として共有するのである。

授業づくりのための根幹をなす事柄を理解する必要性を考えれば、学生たちが大学で学ぶ「理論や理屈」が否定されるものではないだろう。しかし、A 6 による記述からは、学生自身がその良さを実感しうる「参考になる実践例」を強く求めていることが察せられる。一方で、A 1 による記述からは、「理論や理屈」についての議論が行われていたことが察せられる。

B. 外国語教育

B 2 英語の分科会に参加させていただいたが、ここでは大学では学びえないリアルな教育現場の声を聞くことができた。特に教育困難校における授業実践は、今まで私が一度も目の当たりにしたことのない

現場でのものであり、今後教員を目指す上でも大変重要なお話であったように感じる。

B 6 私は英語のグループに参加したのだが、そこでは遠隔操作での授業のやり方や、英語教育を無理やりやらされている教師の話について聞くことができた。遠隔操作とは、地方の学校へ、インターネット回線を通じて授業を行うというものであるが、これが非常に教師の負担になっているという事であった。小学英語の実情については、英語が得意でなく、今まで小学校で英語を教えるための教育を受けたことがないにも関わらずALTと英語だけで会話をさせられたり、指導案を1からつくられているという事が分かった。

B 13 私は小学校の教員を志望しているので小学校の外国語活動に興味があるのだが、大学の授業では英語を専門にしている先生の話は聞くことはあっても、英語は本当に苦手で困っているという先生の話は聞くということはめったにない。しかし、今回の合同教研ではそのような先生の話が聞け、とても新鮮だった。また、まだそこまで深く考えたことはないが、この先英語教育に携わっていくものとして考えていかなければいけない問題の討論にも参加できた。何もきちんとした意見が言えない自分に腹が立ったりもしたが、あのような場で意見を言うという経験は今後役に立つと感じた。

上記B 2・B 6・B 13の3者による記述は、いずれも教育実践を行う際の困難に関するものである。B 6の述べたインターネット回線を利用した「遠隔操作での授業」や、B 13の述べた英語が「本当に苦手で困っているという先生の話」などは、教育実践にかかわる現代的な課題と言えるだろう。

C. 社会科教育

C 4 全体を通して感じたのが、社会科はやはり暗記型の授業というイメージは未だに強く、それをいかに打開していけるかという課題をもとにいろいろな工夫を取り入れているということである。生徒の日常生活と結びつけたりすることで、身近に感じ、興味や関心を持たせられるようにしたり、生徒が授業を通して自分の意見や考えを持ち、今後の生活に少しでも活かすことができればという思いが伝わってきた。

C 3 分科会の閉鎖性があると思う。今回参加してみて、難しい話も多く、専門以外の人には議論に加わりづらいのではないかと感じた。どのような人が来たとしても参加できるような場にする必要があると考ええる。

C 8 合同教研(私が参加したのは社会科のみ)では、たくさんの先生や関係者の方が自分の授業実践を発

表していた。(中には自分の学校の問題を相談している人いた。)そして、その後の意見交換では、教材、学習者反応、学習展開などの方向から具体的な意見が出され、活発な議論がなされていた。授業にとって、とても参考になったのではないのでしょうか。自分とは違う教育に対する考え方を知り、自分の教育に対する考えが深まっていったと思います。

C 4の述べる「暗記型の授業というイメージ」を打破していこうという意欲的な実践が数多く見られたことがうかがわれる。一方で、C 3による「分科会の閉鎖性」や、C 8による「自分とは違う教育に対する考え方」といった記述は、社会科学分科会の主流をなす民間教育団体⁵⁾の主張に起因するのではないかと。

D. 数学教育

D 6 合同教研にはたくさんの意義があると感じる。しかし、私自身のレベルが低いため、まだ発表に対しあまり質問したり意見交換したりすることができなかった。意見交換の場であっても意味がなくなってしまうと感じた。このような面について、私自身のレベルを上げる必要があるし、合同教研のほうも誰でも意見交換しやすい場の提供をしてくれるとさらに良いものになるのではないかと感じた。

D 3 また、教師同士ならではの悩み、意見の相談ができる場であるとも思う。私は数学の分科会に参加したが、その発表の中で、自分の反省点を挙げ、どうすべきだったかと他の教員などに投げかけ、悩みや問題を解決するという場面がいくらか見られた。そこでは、さまざまな意見が飛び交い、一人で考えるよりもはるかに効率も内容的にも充実したものであったと感じた。その教科の専門家が多数出席している分科会で議論することで内容の濃い問題の解決策・悩みの解決ができると思う。

社会科学教育分科会と同様に、数学教育分科会参加者には民間教育団体関係者が多数参加している⁶⁾。これら関係者には数学教育研究者も含まれており、学問体系に沿った数学教育の在り方に関する議論が交わされているようである⁷⁾。D 6による「私自身のレベルを上げる必要」や、D 3による「内容の濃い」といった記述は、分科会の体制に起因すると思われる。

E. 理科教育

E 3 私は理科の分科会に参加したが、10人ほどの小中学校・高校の先生や退職された先生、大学の教授など様々な立場の人が参加していた。授業の様子を発表する教師もいれば、理科教育の現状を発表する人もいた。情報が得られ、さらにそれをその場にいる人で討論することにより、考えがより深まる。

⑤理科教育

2日間にわたりレポート15本、そして共同研究者の田中実氏から科学的リテラシーについての提案がありました。

理科分科会は近年、学生が参加していますが、今年は教育大学の学生さんが多数参加しました。分科会の最後に「教育大学に入ったけれど教員には興味がなかった。でも、今日の話を聞いてなってみようかなと思った」と話してくれ、分科会の意義の広がりを感じました。チベットから留学してきたばかりの学生さんも「チベットには実験道具がない。ぜひ、色々な実験を覚えて帰りたい」と前向きでした。(以下、略)

図8 理科教育分科会への学生参加に関する記事(抜粋)

(『北海道高教組情報』2009年12月7日)

E 4 私は、理科のブースでの研究発表を多く聞かせていただいた。研究はどれも具体的、実践的で大変興味深かった。実践者から直接話を聞くことによってより具体的に内容を理解できることに加えて、実践の発表後にその研究を聞いている私たち学生を含め、そのほかの発表者の方々、大学の教授方、そして実際に小学校や中学校で教員を現役でやっている方の実践に対する意見交流や質問の場が設けられていて、その場で疑問や、詳しい内容を聞くことができた。

E 5 私は理科分科会に参加しましたが、そのレポートの多くが実験の実践であった。理科の授業では目に見えない物について考えることが多く、巨視的視点から微視的視点への変換が必要となる。それが理科教育の大きな目的の一つであり、また理科教育において最も難しいことの一つである。今回の合同教研ではそのことを生徒に理解させるために創意工夫のなされた実践が多くあった。

学生の記述にある「大学の教授」は、北海道大学と北海道教育大学の教育方法学研究室の研究者を指す。理科教育分科会では1974年の合同教研開始時より教育研究者が深く関わり、実践を足場とした教育研究が展開されてきた。このような教育研究の蓄積が、「意見交流や質問の場」を参加者すべてに確保した上で「考えがより深まる」議論を達成する一因ではないか。

理科教育分科会における活発な交流の様子は、図8からも察せられる。

F. 教科外

F 4 私は不登校・登校拒否・高校中退の分科会に参加させていただいた。大学の講義で、いじめやふとしたことがきっかけで不登校になる子はたくさんいること、そういった子にはその子の気持ちになって接し、家庭訪問など、学校復帰のために色々努力しなくてはならないといことを学んでいたの、こ

の分科会でもそういった議論がなされているのかと思ひ、入室した。しかし、実際に中でなされていた議論は違った。子どものことを本当に考えた場合、学校復帰だけが考えられる手段ではないこと、フリースクールなどの実践、不登校の過去を持つ青年がこれから前向きに生きていけるための取り組みなどがその内容だった。まずここで自分のこれまでの固定観念であった、「不登校の子どもはどう復帰させるかが重要である」という考えが覆された。これが現場の実態なのかとわかった。

F 1 私が参加したのは、「障害児・障害者の教育と福祉分科会」である。専攻が特別支援教育であることもあるが、聞き入ってしまうものばかりであった。(中略)、教研の意義として、その場で意見交換を行うことができることもあるだろう。わからなかったことはその場で聞いて、すぐに疑問を解決することができるというのはとても魅力的である。実は、私たちが佐藤先生に質問しようとした際、他にも質問する方が多くて、時間が無くなってしまったのである。なので、分科会が終了した際、私たちは直接、S先生に聞いたのである。分科会外の時間であるにも関わらず、S先生はとても親身になって答えてい

ただいたことを本当に感謝している。

事前資料によれば、不登校・登校拒否・高校中退分科会におけるレポートは1だった⁸⁾。教科教育で1つのレポートによって2日間の日程をカバーすることは困難であるが、この分科会では参加者の議論が中心をなしているようである。この議論が深められたものであったことは、F 4による記述から確認できる。また、講義におけるF 1らによる障害児・障害者の教育と福祉分科会報告では、聴衆の学生が報告内容に対して息を呑んだように静まった後、予定時間をはるかに超える質問が連続して出された。学生にとっては(報告者にも)新鮮な驚きを与える実践だった。

3.2. 合同教研報告会の意義

本節では、講義内に行った合同教研報告会に関する学生のレポート記述のいくつかを抜粋し、報告会の意義について検討する。

B 6 今回の授業では自分たちの参加してきた分科会について発表しあった。これはとても有効な合同教研の活用法だと思う。自分の体は一つしかないの

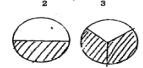
<p style="text-align: center;">合同教育研究会 数学教育分科会</p> <h2 style="text-align: center;">「分数を考える」</h2> <p>【実践の概要】</p> <p>中学生を対象に行った実践である。分数とは、小学校で扱う内容が大竹先生は思いつきで中学2年生に対し、分数の加法 ($\frac{1}{2} + \frac{1}{3} = \frac{5}{6}$ になる理由を説明しなさい) の問題を出題した。そこでの、子どもの考えを紹介していた。</p> <p>【実践の特徴・意義】</p> <p>分数は子どもたちにとって大変苦手なものである。正負の数の計算や方程式などを整数ではスムーズに解ける生徒も分数が入ってくると途端に解けなくなる。実践の意義は、通分や約分の意味の理解するためである。また、算数・数学の指導においては「学びなおし」という言葉がよく使われるように、このような復習は大切なことである。</p> <p>また、子どもたちの多くは「水のかさ」「もの個数」「面積」「ピザ」などを分割して、分数の意味を理解していた。</p> <p>分科会の中では、「水のかさ」「もの個数」「面積」では指導に関してのつまづきがないのに対し、「ピザ」のような円の形をしたものを利用した指導は困難ではないかという意見があった。</p> <p>【質問と回答】</p> <p>質問 : なぜ、ピザのような円の形をしたものを利用した指導は困難なのか?</p> <p>回答 : 分数の指導において、円を利用すると視覚的に取りづらく、円を等分しようとしても等分しづらい場合が生じる。こうなると、せっかく図を書いて理解しようとしても理解しにくい。</p> <p>視覚的に取りづらいため、例えば以下のように通分前の状態のものである。</p> <div style="text-align: center;"> $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$  </div>	<p style="text-align: center;">合同教研参加報告資料</p> <p style="text-align: center;">実践 「分数を考える」</p> <p>1. 実践の概要。</p> <p>中学2年生を相手に分数の加法について扱った実践である。実践自体は授業時間の余裕ができた1時間程度を使っておこなったものであり、完成された実践というわけではない。</p> <p>実践では、分数の計算のしくみがわかっているか、という部分に焦点をあて、「$1/2 + 1/3 = 5/6$になる理由を説明しなさい」という問題をみんなに考えてもらった。この問題を説明するには二つの考え方があり、一つは「$1/2m$と$1/3m$を足すと$5/6m$になる」といった量分数の考え方で、もう一つは「ケーキを$1/2$に分けたものと$1/3$に分けたものを足すと、全体の$5/6$になる」といった割合分数の考え方である。生徒の多くは粘土などの固体を使った割合分数で説明していたが、そもそも量分数と割合分数を混同している生徒が多いようだ。例えば、りんごが6個入った箱があって、その3個分はあくまでも3個であって$1/2$ではない。全体を1と見たときの割合が$1/2$になるということである。</p> <p>このように、量分数と割合分数の考えを混同して教えられたまま中学校になっていることが、分数指導の難しさなのではないだろうか。</p> <p>2. 実践の特徴・意義。</p> <p>分数を理解し、指導するというのは中学・高校の先生ですら、一筋縄ではいかない。分数指導に関する記事は多いが、それでも分数を理解できないまま中学・高校に上がってくる子どもはたくさんいるだろう。そういった子ども達にどのように分数を指導していくかを考えたい。</p> <p>3. 討論の内容。</p> <p>議題：中学生に分数を指導する(復習させる)にはどうすればよいだろうか。</p> <p>高校生でも同じことが言えるが、分数(小学校の内容)の勉強と言うと生徒はやる気をなくしてしまうのではないだろうか。また、知識は小学生以上にあるわけだから、小学校でやるような内容でなく、少しレベルを上げて中学生にも参考になるような内容の指導をおこなうべきではないか。例えば、最小公倍数の考えを分数に取り入れることや、分数を円で表すとき、円を使って表す生徒が多いが、円ではなく長方形を使って表す方が分数に通じていることの指導など。小学校では、量分数と割合分数とをきっちり区別していないので、この区別についても指導の対象にすべきだろう。</p> <p>4. 教研に対する感想。</p> <p>教育の専門家である教師が討論し合い、意見交換をおこなう場に初めて参加したが、その内容はとても充実していた。まず、発表者の実践がどれも驚くほど工夫されており、クラスのニーズや子ども達の理解の度合いに合わせた指導が様々な考えられているのだと感じた。また、この実践では最後に発表者が質問を投げかけるような実践報告であったが、それら報告に対する意見や討論が、実際の教育現場で生かされるような内容であったので、とても参考になった。これからの大学での教育の勉強にぜひ生かしていきたい。</p>
---	---

図9 同一実践に対する2つの報告

で、色んな分科会を覗いてみたいと思っても限界がある。それをこのように発表しあうことで、色んな分科会の情報に触れ、知識や考えを広げていけるので合同教研の後の発表は良い機会だった。

上記B 6と同様な記述は他にも見られた。報告会の実施によって、「自分の体は一つしかない」という状況下で「いろんな分科会の情報に触れ、知識や考えを広げていける」機会を提供しえたと思われる。

またレポート記述には以下のようなものも見られた。

E 7 報告会を通じて、同じ実践報告を聞いても人によって異なった受け止め方をするということがわかった。算数の分数についての実践報告に参加したグループは三つ程度あったように思うが、どのグループも受けた印象や概要のまとめ方が異なっていて面白いと感じた。受け取る側の知識量や理解度などによって情報の伝わり方や感じ方が違うということ、私も今後教員を目指す上で常に念頭に置いて人と接していくことが必要だと思った。

本資料2. 2で示したように、同一の実践に対して複数のグループが報告する例がいくつか見られた。E 7の指摘した分数指導実践では図9にみるように、「実践の概要」と「実践の特徴・意義」の記述に違いがある。

また、学生による質疑応答に関しては、以下のような記述が見られた。

C 9 自分が学んできたことをみんなの前で発表する活動もとても意義があったと思う。自分で資料にまとめることによって理解も深まるし、違う人の発表を聞くことによってさらに興味が増した。さらに、資料にまとめることによって理解も深まるし、違う人の発表を聞くことによってさらに興味が増した。さらに、資料に書いていないことまでつっこんで質問してみることでまだまだ知らないことがたくさんあるんだなということが実感できたし、質問された人はみんなに理解してほしいという気持ちがあったのでとても充実感のある授業形式だった。

E 3 質問をすることで自らその実践に関する報告をしっかりと聞こう、と思えたので、どの報告もとても自分の身になったと感じた。

本資料2. 1で述べたように、学生には報告会での質問を課していた。自由な議論の実現という点から考えれば、質問を課することは適切とは言えないだろう。しかし、質問を課したことにより、学生の集中が高まったようであった。その結果、最初の質問を起点と

して議論が活発化する場面や、1人で多くの質問や意見を述べる学生も複数いた。E 3による「質問をすることで自らその実践に関する報告をしっかりと聞こう、と思えた」との記述は、これらの事実と一致する。講義前半部で解説した白尾実践においても、「認識の共有」が実践の要件として指摘されていた⁹⁾。白尾が子どもたちに対して求めていた実践の目標と同様な事柄が、学生たちの報告によって達成されたと言える。このことは、F 3による以下の記述に確認できる。

F 3 合同教研参加後の講義を聞くと、他の分科会でも同じように特定の領域での実践報告がされているのが分かった。そして、その報告を聞き、自分達でまとめることで報告の内容を自分のものに出れたと思う。

3. 3. レポート記述から把握される学生の認識形成

本資料3. 1および3. 2で抜粋した学生によるレポート記述から、合同教研と講義内報告会への参加によって学生にみられた認識形成は3点に集約される。以下、対応する記述とともに、これら3点について述べる。

第1点は、現代の教育現場のありように対する認識形成である。外国語教育分科会参加者による教育困難校における授業実践や、小学校における英語の実践といった報告は、現代の学校における問題を明らかなものにしている。また、数学教育や理科教育分科会参加者からは、教育研究者や民間教育団体との協力によってよりよい授業実践を行おうとする教員の姿が、講義参加者全員に対して明らかにされた。教科外の分野においても、不登校・登校拒否・高校中退分科会や障害児・障害者の教育参加者による不登校児への対応に対する固定概念の打破や、福祉分科会参加者による、養護教諭と子どもの深い信頼関係に対する驚きといった事柄に、学生たちの新たな認識形成が確認される。

第2点は、学生たち自身による学生としての現状に対する認識形成である。各分科会に参加した学生たちは、意見をうまく言えない自身に苛立ったり、レベルの高い議論に戸惑いながらも、教育実践者や研究者と有益な意見交換を行った。分科会関係者の温かい対応に支えられ、学生たちは実践や研究に対する関心を深め、自身もまた教育現場の一員であることを自覚した。

第3点は、本資料3. 2で述べた、講義内における報告会による認識形成である。他の学生による報告を聞き意見交換を行うことによって、学生たちはより多くの情報を得つつ、実践に対する受け止め方の多様さを知った。これら質疑応答は、学生による理解の深まりを促すものとなった。

以上、教育現場のありようを知ること、学生自身の

現状を知ること、質疑応答による理解の深まりという3点において、合同教研への参加は学生に新たな認識形成の契機となったと考えられる。

おわりに

以上、本資料では教育大学生の報告・レポートを通して、合同教研への参加による実践的学びの実現を目指した大学における教育実践について述べた。合同教研という比較的大規模な研究集会と、教育大学生の実践に対する新鮮な切り口に大きな助けを得たことで、目標の一端を果たすことが可能になったと考えている。

本資料に対する議論の成果を踏まえて、学生による実践的学びの実現の詳細をより明らかにすることが今後の課題である。

註

1) 本章における記述は、2009合同教育研究全道集会実行委員会

- 発行『開催要項』pp. 4 - 9 における記述を引用。
- 2) 白尾裕志「社会科実践と子どもの社会認識-『話し合う』ことと『書く』ことで深める社会認識-」(日本社会科教育学会編『社会科教育研究』No. 107 2009) p. 45
 - 3) 合同教研不参加の学生に対しては、教育内容や実践に関わる論文を提示し、それら論文の意義や問題点について報告をもとめた。また、合同教研に関する報告と同じく、論文執筆者への質問を報告の要件とした。
 - 4) 報告者が参加した総合学習・生活科分科会においても、開始間もなく10人ほどの教職員が入室し満員となったため、入室をあきらめていた学生が見受けられた。
 - 5) 社会科教育分科会の共同研究者4名のうち3名は、北海道歴史教育者協議会の会員である。
 - 6) 数学教育分科会の共同研究者のほぼすべてが北海道地区数学教育協議会の会員である。
 - 7) 北海道大学教育学研究科・教育方法学研究室において数学教育を専攻する教員・院生は、すべて北海道地区数学教育協議会の会員である。
 - 8) 2009合同教育研究全道集会実行委員会発行『分科会レポート一覧』の記述から。
 - 9) 白尾前掲書2) p. 35

(2010年9月15日受理)